

NEWS CAST

May 2010
No. 101

日本がん疫学研究会

退任のご挨拶

代表幹事 秋葉澄伯
(鹿児島大学)



代表幹事の退任のごあいさつを申し上げます。早速ですが、今年度の総会に本研究会と日本がん分子疫学研究会との合併を提案させていただくことになりました。合併が承認されますと、今後、本研究会は新たな体制と日本がん疫学・分子疫学研究会という新名称のもとにさらなる発展を目指すこととなります。したがって、このごあいさつは私にとりまして本研究会の「発展的解消」のごあいさつをさせていただく機会ともなりました。なお、合併に伴い News Cast も本号で最後となります。

第一回の本研究会は 1977 年 12 月 17 日に、富永祐民先生、平山雄先生、古川俊之先生が世話人となられて名古屋で開催され、テーマは「がんの計量疫学」でした。会員数は 1980 年代初めには 100 人弱でしたが、1986 年には 200 人を超え、1990 年代から最近まで 250 人を超えていました。研究会の成長期とも言える 1980 年代は、Olli Miettinen 先生らが先導的役割を果たされた理論的疫学方法論の展開、血清疫学的手法のがん研究への応用、ロジスティックモデルなどによる多変量解析の普及、Norman Breslow 先生らの条件付きロジスティックモデルや比例ハザードモデルによる新しいデータ解析手法の応用、がん登録の重要性の認識の拡大、老健法に基づくがん検診の導入、パーソナルコンピュータの普及など、がん疫学者にとっては大変エキサイティングな時代でした。研究会で取り上げられたテーマにも、計量・分析疫学、統計学、病態・病理、実験的アプローチ、がん登録、一次予防と二次予防、がん対策、ライフスタイル、食事・栄養、職業がんなどのキーワードが並び、そのような時代背景を反映しているように思います。その後、1990 年代には分子生物学的な手法のがん疫学への応用、特に SNP (single nucleotide polymorphism) と発がんリスクの関連の重要性が認識され始め、そのような気運を

背景に急速に進み、2000 年 5 月 15 日に日本がん分子疫学研究会が発足しました。日本がん疫学研究会もこのような新しい方法論の普及とこれを応用した研究の発展に一定の役割を果たしてきました。しかし、分子疫学的研究の発展のためには、これまでのがん疫学研究者とは少し異なった分野の研究者の参加が必要であり、そのためにも新しい研究会の発足が自然であったものと理解しております。

以上のような経緯もあり、両研究会の会員、特に熱心に研究をされておられる会員には重複が多く、研究の興味も重なるところが少なくありませんでした。そのため、数年前から会員の中で、両研究会とがん疫学のさらなる発展には各々の研究会が独立して活動するより合併した方が良いのではないかと議論が高まり、平成 20 年には両研究会の連携協議会が設けられました。昨年の総会で合併に向けた議論をさらに進めるとの提案が承認され、その後、連携協議会・幹事会などの議論を経て、今年度の総会に両研究会の合併が提案されることになっております。

科学研究の発展は新しい方法論の開発・普及によるところが大ですが、本研究会もそのような時代背景の中で、我が国のがん疫学研究の発展に大きな役割を果たしてきました。研究は常に新しい方法論を取り入れ、学問は常に新たな研究分野を切り開いて行かなければ、現在のような急速に変化する時代の要求に応えられません。研究会の重要な役割には、そのような新しい研究分野を切り開こうとする研究者がアイデアや技術に関して情報交換を行い、さらには、自分たちの「マイナー」な研究が世間に認められない中でお互いを励ましあう場としての側面があると思います。もちろん、研究会に学問の主流を占める研究分野の研究者の集まりであることもあるかもしれませんが、major になった研究分野は権威を持った学会に移行して行けばよいのではないかと考えます。

本研究会は、今年、日本がん分子疫学研究会と合併し、新たな旅立ちを行うこととなりますが、これは、ある意味で「脱皮」と言えるかもしれません。新たな枠組みの中で、がん疫学研究の更なる発展を望みたいと思いますが、新たにできる研究会も、今後、何年か経つとさらに「脱皮」を必要とするよう

になるかもしれません。しかし、脱皮を繰り返しても成虫になることを目指す必要はないと考えております。新研究会が常に新しい挑戦を続ける研究者が集い、活発な議論を行う場所としてさらに発展することを祈って、私の退任のあいさつと、(正式に合併が承認される前で少し勇み足のきらいがありますが) 両研究会合併・新研究会発足のはなむけの言葉とさせていただきますと思います。

最後になりましたが、本研究会の事務局は、研究会発足以来、愛知県がんセンターに設置され、研究会の運営、News Cast の発行などで大変お世話になりました。事務局のお仕事に携わってこられた皆様に、この場を借りまして厚くお礼を申し上げます。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

中高年者の基礎代謝力強化は生活習慣病 予防の急先鋒



愛知県がんセンター研究所
田島 和雄

私は 45 歳を過ぎた頃、基礎代謝力の低下とメタボリック症候群を意識し始めた。着慣れたズボンがきつくなり、ベルトも窮屈になってきたのである。折しも、若手研究者として井上真奈美先生(現 国がん研究セがん予防・検診研究セ)が当センター研究所の疫学部に赴任され、私にジョギングを勧めてくれた。さらに、名古屋市立大学公衆衛生学教室に赴任して来られた鉄人、徳留信寛教授との出会いも励みになり、ジョギングはフルマラソンにまで進展していった。但し、私の 10 年余りのジョギング経験から、強度の運動負荷と 20km 以上の距離は身体に悪影響を及ぼす可能性もあるので要注意である。

さて、52 歳になった秋のこと、右拇趾基関節が原因もなく腫脹し、母親が送ってくれたマムシ酒で湿布すると一晩で軽減した。さらに、3ヶ月後と8ヶ月後に同症状があった。しかし、4 度目の発作は本格的で歩くのも苦痛となり、母親の妙薬も効かず、53 歳にして観念し、当センターの整形外科を受診した。教科書通り、発作後の血清尿酸値は 7.1mg とやや低下していた。担当医は誇らしげに「これは典型的な痛風発作です」と説明したが、私も元整形外科医で病名はわかっており、今後の治療

方針を相談するために受診したのである。酒を断つか、薬を飲むか、という決断を迫られたが、幸い主治医も呑兵衛で痛風持ちだったので意気投合し、両方を飲みながら様子を見るのが最良であるとの結論に達した。

まずは、尿細管からの尿酸再吸収阻害剤 (Benzbromarone 50mg) で様子を見ることになった。最初は毎日服用したが、下がりすぎて 1.8mg となったので 2 日毎の投与に切り替えた。それでも 3.0mg と下がり過ぎるので 5 日毎の服用とし、その後は 6~7mg の血清尿酸値に調整できた。後から定期検診の結果を振り返ると、46 歳時の尿酸値は 8.5mg/dl、その後も 8.0mg 前後と高値を呈していた。私の高尿酸血症の原因は酒だけではなく、父親も同様で遺伝的負荷が大きい。高尿酸血症の人たちにはインテリが多く、がんに罹りにくいという俗説が流れていたのので気をよくしていたが、その科学的根拠はなく、現在はがんに罹りやすいという報告まで出てきた。

それから数年間は何事もなく過ごせたが、還暦前の 2007 年 3 月 4 日(日)のことである。午前 5 時に起床、日曜日なのでトイレをすませて再びベッドにもぐり込む。午前 6 時半、左腰部の引きつるような痛みで目覚め、腹部膨満感もあったのでトイレに入ると、冷や汗が出て、吐き気を催してきた。体温は 37.7 の微熱で軽度の悪寒、午前 7 時には経験したことのない体の奥の方から感じる腰痛が段々と強くなってきた。ここで尿管結石の痙攣発作を疑い、家にあったテストテープで検尿すると強度の潜血反応が出た。恐らく、前日に焼酎を飲み過ぎて脱水状態となり、尿酸カルシウムの結石が成長し、腎臓から動き出したのである。

その時は不運にも家内も娘も留守、自分で入院の用意をし、激痛を我慢しながら運転、やっとの思いで午前 9 時ががんセンターの所長室にたどり着いた。当直医と連絡が取れて外来の入院治療室へ入れてもらい、輸液と鎮痛剤の点滴を開始して一息ついた。このような救急患者の立場になると病院の存在がいかに有難いものか実感できる。一般的な痙攣発作の経過通り、約 5 時間で痛みが軽減し退院できた。後日、泌尿器科に受診して CT 検査をしたら膀胱の手前の左尿管に 5mm 大、左腎臓内に 2mm 大の 2 個の結石が検出された。それから 1 ヶ月半後、米国ワシントンへ出張の途中、機内で用をたしているとペニスの先に突き刺すような痛みを伴う違和感を覚えた。何と見ると 5mm 径の白色結石が先端で光っており、まさに腎結石が生まれた感動の瞬間であった。その後は腎結石の形成予防も考慮し、いつもの半分量を 2 日毎の分散服用方法に変え、水分も多めに取るよう

に心懸け尿酸値も 6.5mg 前後に落ち着いた。その後の CT を検査で左腎臓内にあった結石も消えていたが、主治医は「尿酸値の高い人は何回でもできますよ」と事もなげに言った。

まずは一件落着くということであるが、予防医学者が生活習慣病のために薬を飲むという屈辱感に苛まれた。遺伝的負荷以外に血清尿酸値の上がる原因は年齢による基礎代謝力の低下、仕事上のストレス、それに酒の飲み過ぎである。前者の二つは何とか対応できると考え、次に思いついたのは毎日 2 時間あまりの速歩による基礎代謝力の回復と詩吟を大声で唸ってストレスを解消することであった。幸いにも拙宅はがんセンターから北東 7.5km 離れた丘にあり、その間に 3.5km の矢田川を挟んでいる。今から車通勤を止め、自分の足で往復すれば毎日約 2 時間の運動(速歩で 15km、約 2 時間、17,000 歩)ができる。私は出張しない限り、土・日曜日も通常に出勤しているので毎月 300km 以上は歩くことになる。それに矢田川河畔は詩吟を唸るのに格好の場所、毎日 1 時間は練習できるので脚力のみならず喉力も上がる。62 歳を向かえた春から予防実験を開始した。

生活習慣の改変と投薬などによる血清尿酸値の変動

約一年間にわたる実験の 1 例報告 (田島和雄、男、62 歳)

血清尿酸値	低下対応方法		
	投薬 尿再吸収阻害剤 (25mg/2 日)	運動 速歩 (週 6 日) (15km/20,000 歩)	飲酒 完全断酒 (1ヶ月)
8.5mg/dl	×	×	多量 (3 合以上)
8.0	×	×	節酒 (2 合以下)
7.5	×	×	○
	×	○	多量
7.0	×	○	節酒
6.5	×	○	○
	○	×	節酒
6.0	○	×	○
5.5	○	○	節酒
5.0	○	○	○
推定低下量	1.5mg	1.0mg	1.0mg*

×：なし ○：あり *多量摂取から完全断酒(節酒の場合は 0.5mg)

私の今回の実験メニューは、1)1 ヶ月間の完全断酒と期間限定の節酒、2)間歇的な尿酸再吸収阻害剤の休薬、4)通勤時間を利用した毎日 15km の速歩、などの組み合わせである。実験期間中は 2 週間毎に尿酸値などを測定した。それらの結果をまとめて要約すると、表のように私の血清尿酸値は尿酸再吸収阻害剤の投薬

で 1.5mg 下がり、毎日 15km の速歩で 1.0mg 下がった。一方、節酒から完全断酒に切り替えても 0.5mg と低下効率は良くない。今回の実験結果から得られた結論は、毎日 15km の速歩を継続すれば、投薬しなくて酒を適当に飲みながら尿酸値を正常範囲に保つことができる、ということだった。

今回の報告は一実験例であるが、本人は仮説通りになったので大いに満足している。医療現場においては患者集団から得られるエビデンスも重要であるが、実際には一症例一経過の観察の方が重要なのである。ちなみに私の平均血清脂質は、HDL コレステロール 100mg/dl、中性脂肪 70mg/dl、とかなり良好である。今回の実験により、定期的な軽度の持続運動こそ生活習慣病の予防対策の急先鋒であることを再認識した。さらに、1 ヶ月間の完全断酒を経験できたことは大きな副産物で、節酒習慣のためにも月曜日を休肝日(飲まんデー:No Monday)とすることにした。

平成 22 年 5 月 8 日記す

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

* 合併に向けての新研究会名決定 *

新研究会名：日本がん疫学・分子疫学研究会

平成21年6月16日の日本がん疫学研究会総会におきまして、本研究会と日本がん分子疫学研究会と合併する方向が了承され、平成22年2月に両研究会会員の皆様と同じ方法による投票にて新研究会の名称(3つの候補名を中心に)を決定することになりました。3月11日に両研究会から各2名づつの立会人のもと、愛知県がんセンター研究所において厳正に開票し、結果は以下の通りで、新研究会名は「日本がん疫学・分子疫学研究会」となりました。

(日本がん疫学研究会) 総投票数：116通
有効：115通 無効：1通

(日本がん分子疫学研究会) 総投票数：62通
有効：62通 無効：0通

(両研究会からの重複投票:10通、重複を除く有効返送数:167通、内封筒なし:10通、内封筒名前有り:4通、開票対象投票数：153票)

日本がん疫学連合研究会： 35票
日本統合がん疫学研究会： 19票
日本がん疫学・分子疫学研究会： 94票
無記入： 5票
合計： 153票

立会人：
日本がん疫学研究会(田中英夫、鈴木貞夫)
日本がん分子疫学研究会(浜島信之、菊地正悟)

日本がん疫学研究会学術集会開催および記録集発刊の状況

回数	年月日(世話人、会長)	開催地	主 題	記録集発刊状況
第1回	1977年12月17日 世話人：○富永祐民、 平山 雄、古川俊之	名古屋	がんの計量疫学	篠原出版：癌の臨床別集「がんの計量疫学」平山雄編、1980年7月25日刊(¥3,600)
第2回	1979年5月27日 世話人：富永祐民、 平山 雄、青木国雄	名古屋	日本人に多いがん、少ないがん、—その疫学と病態生理—	篠原出版：癌の臨床別集「がん・日本と世界—その動向と病因論」長与健夫、富永祐民編、1980年10月20日刊(¥6,000)
第3回	1980年6月28日 世話人：○藤本伊三郎、 平山 雄、青木国雄、 富永祐民	大阪	がん登録の疫学的意義とその応用	篠原出版：癌の臨床別集「がん登録と臨床疫学」藤本伊三郎、大島 明編、1981年4月13日刊(¥3,500)
第4回	1981年6月27日 世話人：○久保利夫、 平山 雄、青木国雄、 藤本伊三郎、富永祐民	埼玉	がん研究—疫学と病理学の接近—	篠原出版：癌の臨床 Vol.28, No.8, 1982特集「がん研究、疫学と病理学の接近」
第5回	1982年6月11日 世話人：○栗原 登、 加藤寛夫	広島	がん研究における生物学と統計学の接近	(抄録集のみ)
第6回	1983年6月2日 会長：倉恒匡徳	福岡	職業がん	篠原出版：癌の臨床別集「職業がん—疫学的アプローチ」倉恒匡徳編、1984年12月1日刊(¥3,900)
第7回	1984年6月22日 会長：久道 茂	仙台	がんの一次予防と二次予防	篠原出版：癌の臨床別集「がんの一次予防と二次予防」市川平三郎、久道茂編 1987年3月30日(¥5,500)
第8回	1985年6月28日 会長：加美山茂利	秋田	がんと食事・栄養—疫学的ならびに実験的アプローチ—	篠原出版：癌の臨床 Vol.32, No.6, 1986特集「がんと栄養・食事—疫学的ならびに実験的アプローチ」(¥4,000)
第9回	1986年6月26日 会長：村田 紀	千葉	がん病因における宿主要因と環境要因	篠原出版：癌の臨床 Vol.33, No.56, 1987特集「がん病因における宿主要因と環境要因」(¥4,300)
第10回	1987年6月12日 会長：大野良之	名古屋	がんの分析疫学研究—方法と解析—	篠原出版：癌の臨床別集「臨床家のためのがんのケースコントロール研究—理論と実際—」大野良之編 1988年6月1日刊(¥5,500)
第11回	1988年6月3日 会長：渡辺 昌	東京	がん対策において疫学は何ができるか？	篠原出版：癌の臨床 Vol.35, No.2, 1989特集「がん対策において疫学は何ができるか」(¥4,500)
第12回	1989年6月17日 会長：廣畑富雄	福岡	がんとライフスタイル—がん予防への道—	篠原出版：癌の臨床 Vol.36, No.3, 19902月臨時増刊号、特集「がんとライフスタイル—がん予防への道」(¥5,150)
第13回	1990年7月6日 会長：三宅浩次	札幌	がんとライフスタイル	篠原出版：癌の臨床 Vol.37, No.3, 19912月臨時増刊号、特集「日常生活とがん予防」(¥4,326)
第14回	1991年6月13日 会長：稲葉 裕	東京	がんと先行病変	篠原出版：癌の臨床 Vol.38, No.3, 1992特集「癌と先行疾患」(¥4,850)
第15回	1992年6月12日 会長：大島 明	大阪	がん予防の実践とその評価	篠原出版：癌の臨床 Vol.39, No.4, 19933月臨時増刊号、特集「がん予防の実践とその評価」(¥4,700)

第16回	1993年6月26日 会長：中村健一	東京	がん疫学研究の原点と展開	篠原出版：癌の臨床 Vol.40: No.2, No.4, 1994 特集「がん疫学研究の原点と展開(1),(2)」(各¥1,900)
第17回	1994年6月3日 会長：渡辺 決	京都	がん疫学研究と臨床医学の接点	篠原出版：癌の臨床 Vol.41, No.4, 1995 特集「がんの高危険群の臨床疫学的特徴」(¥1,900)
第18回	1995年6月2日 会長：馬淵清彦	広島	がんのリスク評価	篠原出版：癌の臨床 Vol.42, No.4, 1996 特集「がんのリスク評価」(¥1,900)
第19回	1996年8月26日 会長：徳留信寛	名古屋	食生活関連がんの予防	篠原出版：癌の臨床 Vol.43, No.4, 1997 特集「食生活関連がんの予防」(¥1,900)
第20回	1997年4月1日 会長：福田勝洋	久留米	日本がん疫学研究会の20年と課題	篠原出版：癌の臨床 Vol.44, No.1, 1998 特集「日本がん疫学研究会の20年と課題」(¥2,100)
第21回	1998年6月7日 会長：山本正治	新潟	環境と発がん	篠原出版：癌の臨床 Vol.44, No.12, 1998 特集「環境と発がん」(¥2,100)
第22回	1999年7月15日 会長：簗輪真澄	東京	古くて新しい課題	篠原出版：癌の臨床 Vol.45, No.12, 1999 特集「古くて新しい課題」(¥2,100)
第23回	2000年7月13日 会長：森本兼曩	淡路	ライフスタイル変容と遺伝素因	篠原出版：癌の臨床 Vol.46, No.13, 2000 特集「ライフスタイル変容と遺伝素因」(¥2,100)
第24回	2001年7月12～13日 会長：清水弘之	名古屋	日本におけるがんコホート研究	(抄録集のみ)
第25回	2002年7月15～16日 会長：吉村健清	熊本	感染と癌	篠原出版新社：癌の臨床 Vol.49, No 1, 2003 特集「第25回日本がん疫学研究会」(¥2,100)
第26回	2003年6月23～25日 会長：岸 玲子	札幌	職業・環境がんの疫学	篠原出版新社：「職業・環境がんの疫学－低レベル暴露でのリスク評価」¥3,000(単行本)
第27回	2004年7月15～16日 会長：津金昌一郎	東京	食品成分とがん－疫学から予防への展開	(抄録集のみ)
第28回	2005年7月14～15日 会長：渡邊能行	岐阜	がん疫学研究－社会還元から臓器特異性まで	(抄録集のみ)
第29回	2006年5月19～20日 会長：秋葉澄伯	広島	ウイルス関連がんと放射線	(抄録集のみ)
第30回	2007年7月12～13日 会長：山口直人	東京	がん予防大会 in Tokyo *がんのハイスカグループに対する有効ながん予防方法 *がん予防におけるがん検診の役割	(抄録集のみ)
第31回	2008年5月22～23日 会長：古野純典	福岡	がん予防大会 2008 福岡「食物・栄養とがん予防」	(抄録集のみ)
第32回	2009年6月16～17日 会長：田島和雄	名古屋	がん予防大会 2009 愛知「予防の容易ながん困難ながん」	(抄録集のみ)

日本がん疫学研究会会員数の推移

2010. 5. 1 現在

★ 編集後記 ★

年月日	総会員 数	幹事 ・監事	特別 会員	顧問 会員	賛助 会員
1981. 10. 3	93	5			
1982. 7. 1	99	19		3	
1983. 5. 20	115	18		3	
1984. 5. 31	146	17		3	
1985. 7. 1	184	29	1	3	1
1986. 6. 1	206	29	1	3	1
1987. 5. 1	220	27	3	4	1
1988. 5. 1	233	27	3	4	0
1989. 6. 1	241	30	7	4	0
1990. 6. 1	263	30	8	8	0
1991. 6. 1	273	31	8	8	0
1992. 6. 1	277	32	9	8	0
1993. 6. 1	276	31	11	8	0
1994. 5. 20	270	34	11	8	0
1995. 5. 10	271	33	12	9	0
1996. 8. 1	263	34	11	9	0
1997. 3. 1	271	34	13	9	0
1998. 5. 1	282	33	15	9	0
1999. 6. 1	269	33	15	9	0
2000. 6. 10	263	32	18	9	1
2001. 6. 20	259	31	19	9	1
2002. 7. 1	257	33	19	10	1
2003. 6. 10	258	34	20	10	1
2004. 6. 15	250	34	21	10	1
2005. 6. 20	246	32	23	10	1
2006. 5. 1	244	31	21	10	1
2007. 6. 15	226	31	21	9	1
2008. 5. 10	228	32	22	9	1
2009. 6. 1	212	30	20	9	1
2010. 5. 1	200	30	21	8	1

日本がん分子疫学研究会との合併を7月に控え、がん疫学研究会としては最後の NEWS CAST となりました。そこで本会の歩んだ歴史を残しておくため、第1回からの学術集会の開催状況と記念集の発刊状況を年表にするとともに、会員数の推移を併せて掲載しました。

総会員数は1998年をピークに漸減傾向にあり、その原因分析と今後のがん疫学研究のあり方を検討すべき好機かと思われ、合併後の新体制の下で検討がなされることを期待します。

機関誌も新たな体制で発刊されると思いますが、事務局は引き続き愛知県がんセンター研究所に置かれる予定ですので、今後ともご支援の程お願い申し上げます。(田中 英夫)

「日本がん疫学・分子疫学研究会」としての発展に向けて、日本がん疫学研究会の NEWS LETTER としては最後の号となりました。学術集会の開催状況を第1回から第32回まで並べて見ると、「がん疫学」の幅広さを改めて痛感致しました。自分自身を振り返ってみると、いつの間にか、学術集会への参加数が開催数の半数を超えていました。歴代世話人・会長の先生方の教を踏まえながら、それに恥じないよう、がん疫学研究のさらなる発展に向けて、なお一層努力していきたいと思えます。

本研究会の事務局を担っておられる愛知県がんセンター研究所の皆様には、大変、お世話になりました。新体制後も引き続きよろしくようお願い申し上げます。(味木 和喜子)



発行

日本がん疫学研究会

事務局 〒464-8681 名古屋市千種区鹿子殿 1-1
愛知県がんセンター研究所 疫学・予防部 内
TEL : 052-762-6111 (内線 7316)
FAX : 052-763-5233

編集責任者

田中 英夫

味木 和喜子